

花の都パリ

～至福のひとつとき～

山川 翠 (やまかわ・みどり)

私はフランスのリヨンという街に留学していた。留学中に3度パリを訪れることができた。パリと言えば、誰もが認める観光都市であり、外国人観光客数も世界一である。(注1)

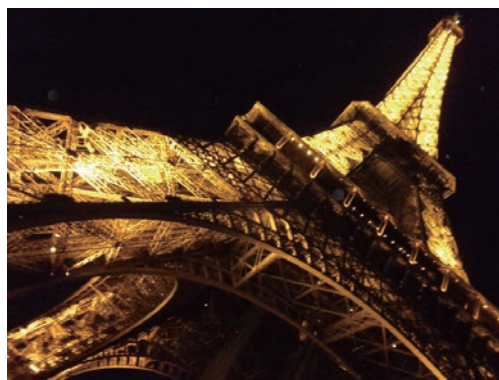
パリという街が世界中の人々から愛されている理由を、私自身がパリで経験したことに基づいて考えていこうと思う。

まず、第一の理由が「美術館」である。パリにはたくさんの美術館がある。その中でも、有名なルーブル美術館は、ゆっくり観ていてはとても1日では時間が足りないほどである。モナリザなど有名な作品も多く、芸術の知識が乏しい私でも十分楽しめた。何度でも行きたいと思える美術館で、丸1日を費やしてでも行く価値は十分にあるので、ぜひ生きているうちに1度は言ってほしい。

第二の理由が、「建造物」である。パリには、エッフェル塔など有名な建造物がたくさんある。エッフェル塔は外見も素晴らしいが、何よりも登れることが1番の魅力である。頂上までエレベーターで行けるが、人が多いので頂上にたどり着くまで長い時間がかかる。しかし、パリを一望できるこの景色は本当に素晴らしい。それにエッフェル塔に登った際は、頂上で売っているシャンパンをぜひ飲んでほしい。シャンパンを片手にみる景色は最高の一言に尽きる。

そして、最後の理由は「セーヌ川」である。正確に言うと、セーヌ川クルージングである。私は留学を終え、最後にパリという街をもう1度味わいたかったので、旅行してから帰国することにした。その時にどうしてもしたかったのが、このクルージングである。フレンチを楽しみながらのクルージングであった。ドレスアップしなければいけなかったので、少し緊張したが、雰囲気もよく、料理もワインも格別であった。店員も美男美女で、まわりの客も美男美女で、映画のワンシーンに飛び込んだようであった。そして何よりも私を現実から引き離れたものは、セーヌ川から見るパリの夜景である。ライトアップされている街。言葉では表すことのできない、今でも忘れられない景色である。私が体験した最高の食事、最高の景色を1人でも多くの人に、話ではなく、自身で体験してほしいと私は願う。

パリには、芸術、建造物、「食事」、景色など、様々な分野が素晴らしく、誰が訪れても楽しめるものが必ずある。しかもあるだけではなく、それら全てのものが最高級であるので、現実とは思えないような素晴らしい時間を、観光客たちは過ごすことができる。上記のことが、パリという街が世界から愛されている理由だと思う。



参考文献 (注1) <http://www.ambafrance-jp.org/article6762>

絶体絶命！ニューヨーク一人旅

～不運は幸運のはじまり！？～

岡村 真奈美

2014年11月17日、十数時間のフライトを経て、わたしはニューヨーク州にあるJFK空港に降りた。はじめてのニューヨーク。はじめての海外一人旅。これからの1週間で体験するであろうたくさんの“はじめて”に対する期待と不安が入り混じった不思議な気持ちであった。

到着が夜であったので、わたしはすぐに宿泊予定のゲストハウスに向かうために地下鉄の乗り場を探して歩き出した。すると、タクシーの客引きにも負けずに歩いている私に、ひとりの黒人男性が行先を尋ねてきた。ホテルがある場所の地名を答えると、この時間帯にはその地域への電車が動いていないということが伝えられ、タクシーに乗るしかないのか、と泣く泣くその男性について行った。(のちに電車はホテルの最寄り駅まで普通に動いていたということを知る・・・) ニューヨークのタクシーといえば黄色いボディーのイエローキャブが主流であるが、連れて行かれた先にあったのは黒い車であった。これはやばい。瞬間的にそう感じたが、時すでに遅し。わたしの荷物はすぐにトランクに放り込まれ、断る勇気が出ずに車に乗り込んでしまうのであった・・・

車に乗ってから約40分。無事、目的のゲストハウスに到着した。車内では、もしこのままマフィアとかギャングのアジトに連れて行かれたらどうしよう・・・！と内心ビクビクしていただけに、普通に目的地に着いただけで何ともいえない達成感があった。そして支払い。日本から五万円分換金していった米ドル札を初めて使う瞬間。請求額は、460ドル。460ドルね、はいはい。えーっと、え？460！？46000円！？焦った私は、運転手に何度も確認し直したが、運転手のミスでもなく私の見間違いでなく、本当に460ドル請求されているらしい。いくら抗議をしても埒があかず、おまけにATMにまで連れて行かれそうになったので、生きて帰ることを選ぼう、と最後には素直に全額を支払った。

一週間の海外旅行の初日にほぼ全財産を失ったわたしは、途方にくれながらゲストハウスのチェックインを済まし、心細さからたまたま居合わせた日本人のグループに話しかけた。笑い話にして気持ちを落ち着かせよう、と先ほど起きた出来事を話すと、なんと見ず知らずの学生である私に、お金を貸して下さったのだ。本当に温かい方たちで、その無償の優しさに触れたわたしは、その場で思わず涙してしまった。本当に自分は幸せ者だとさえ感じてしまった。

この一週間でニューヨークを舞台にいろんなひとに出会い、一生忘れられないような経験をたくさんした。出だしからお金を失うはめにはなったが、いまでは大金を払って教訓と出会いを買ったと考えているし、いまでは絶対にまたニューヨークに来よう！と思えている自分がある。今回の旅行でした全ての経験は、宝物として記憶のなかに大切にしまっておきたい。



伝えられない幸せ

伊藤 綾香

ふわりと身体を包む雰囲気小さく息を吐く。周りで話されている言葉は特別神経を尖らせなくても難なく聞き取れるし、わざわざ立ち止まらなくても表示の意味するところを理解できる。見渡すと自分と同じような顔の作りをした人がたくさんいる。帰ってきてしまったのだという寂しさと、何とかやり遂げたという僅かな充足感が胸を擦った。

よれて伸びてしまったTシャツやおみやげにと買ったカンガルーのぬいぐるみを甘すぎる柔軟剤の香りと一緒に無理矢理詰め込んだキャリーケースを引きながら、到着ロビーに出てこの一ヶ月と少しを共に過ごした友達と話していると、空港まで娘や息子を迎えに来てくれているのであろう人溜まりの中に、ビデオカメラを構えている2人組が見える。おばあちゃんとお父さんだ。私は恥ずかしさとそこからじわりと沸く苛立ちで軽く舌打ちしてから、カメラのフレームの中から逃げるようにさっさと友達の陰に入った。そのまま始まった引率の先生の、事務連絡と労いの言葉を聞く。その間もずっと回り続けるカメラにばかり気が行って、和やかなその場の雰囲気とは反対に、私の機嫌は損なわれていくばかりだ。

やがてひとり、またひとりと人の輪がほどけていき、ずっと話していた友達も電車の時間があるからと行ってしまった。そこで改めて迎えに来てくれた家族の方へ視線を遣る。まだビデオを構えている。いい加減にしてほしい。沸き続ける苛立ちをそのまま表情に乗せながらつかつかと歩み寄り、一言やめてと言った。

「何でも記録しとかんな。後で見返した時思い出になるやん。」

私のぞんざいな態度に眉を寄せるおばあちゃんの隣でそう言って呑気に笑うお父さんが、また私の心に棘を生やす。鬱憤と一緒にただいまを飲み込んで、無言のまま駐車場の方へ歩き出すと、後ろからついてきたお父さんに両手を塞いでいた荷物を全て取られた。

「おかえり。」

お父さんに向かって今まで散々好き勝手に生やしていた棘が、自分に刺さったような気がした。

二人に手伝って貰いながら荷物を車の後ろに積んで、ようやく空港を後にする。その時になってどっと疲れが出た私は、後部座席のシートに体を投げ出したままおばあちゃんから繰り出される色々な質問に適当に返事をしていた。始めはそうして、ホームステイ先はどうだったか、料理は大丈夫だったか、何か困ったことはなかったか、とあちらの暮らしぶりについて質問攻めをしていたおばあちゃんだったが、私に答える気がないことを察したらしい。心配していたのに、という旨の私への文句を最後に黙ってしまって、車の中にはどこか重い沈黙と、エンジン音だけが響いていた。

「これ、食べ。」

うつらうつらしていた私を、おばあちゃんの声が引き戻す。視線を上げると、助手席から振り返ったおばあちゃんが手作りのお弁当を差し出してくれているところだ。一瞬迷ったものの、これ以上機嫌を損ねないようにと一応受け取る。

「向こうではどうせ洋食しか食べられへんかったんやろ。」

おばあちゃんの声を受けながら蓋を開けると、私の好きな和食のメニューがきちんと詰められていた。どこからか、オーストラリアへ出発する前日のおばあちゃん言葉が吹いてきて耳を撫でた。

あの日、久しぶりに外へ夕食を食べに出ようとおばあちゃんが言い出した。行きたいらしいのは、近所の定食屋さん。和食が美味しく、私も気に入っていた。ただ、定年退職した老夫婦が二人きりで切り盛りしているので、料理が出てくるスピードが遅く、せっかちなおじいちゃんはそれが気に食わない。少し遠くなるが、晩御飯はすぐに食べられるファミリーレストランにしようと言い張った。しかしおばあちゃんが引かず、結局家族揃って和食を食べたのだ。明日から綾香が和食食べれなくなるからというおばあちゃん言葉に負けて。

おばあちゃんから温かいお茶を受け取りながら、フォークで卵焼きをつつく。正直、ろくに動くこともままならない飛行機の中で、それでもきちんと3食分機内食を食べていた私は、あまりお腹が空いていなかった。それでも、なんだか食べなければならない気がした。おばあちゃんの手料理はいつだって美味しい。鼻の根元がツンとして、目の奥がじんわり熱い。それなのに、私がおばあちゃんに返せたのは、車が家に着いた時にぼそりと呟いた「ただいま」だけだった。





アオスジアゲハの思い出

稲田 悠花

私の目の前を飛ぶ一匹の蝶を見ながら、毎年思い出す出来事。アオスジアゲハ、また今年も会えたね。君との思い出はもう数年前になっちゃった。年が経つのは早いね。そんな事を思いながらふっと微笑む私。アオスジアゲハはそれに答えるように、私の前を踊るように飛んでいる。

小学校3年の夏休み、私は父と一緒に花壇に植えこみをしていた。虫嫌いなうえに、比較的都会で過ごしてきて虫に免疫がない私にとってこの作業は苦痛でしかなかった。「うわーダンゴムシいっぱいいる！気持ち悪ーい！もう嫌だ」と文句を言いながらも父が隣で作業している為、さぼるな！と怒られないように、どこに植えたらいいか見る係と称しくルクル花壇を見回っていた。楽な上に怒られないで済んでしめしめと内心思っていたとき、アリの大群を見つけた。うわあ、最悪・・・と思っていると、そのアリの大群が一匹の弱った青虫を攻撃していた。「お父さん！アリが・・・アリが青虫を！！」青虫がたった一匹で弱った体をクネクネしながら必死に抵抗するのを見て、何とかして助けてもらわないと！と思ひ急いで父を呼ぶと、父は冷たく「アリだって生きるのに必死なんだ。自然の定理なんだよ。だからほっときなさい。」とだけ言って花壇の整理を黙々とした。自然の定理など全く知らない私は、なんて冷たい父なんだ！最低だ！と思い、同時に自分で何とかこの子を助けてあげなくちゃと、助け出そうと近くにあったホースを手に取りアリに向けて水を発射した。するとアリは青虫から離れて、さーっと自分の巣のほうへ戻っていった。肝心の青虫はアリとの必死の抵抗で体力を使ってしまい、瀕死の状態となっていた。「お父さんがもっと早く助けてくれたらこんな事にならなかったのに！！」と大泣きしながら父に言い、花壇に生えてある葉っぱを何枚かちぎり虫かごの中に青虫とともに入れた。そして「ごめんね、ごめんね。」と泣きながら、青虫の回復を必死に願った。

その甲斐あって青虫は順調に回復して大きくなり、さなぎにまで成長した。虫嫌いだった私がペットのように名前を付けて、毎日可愛がっていた青虫。それがさなぎになる事が出来たと同時に、蝶になると知り喜びに満ち溢れていた。昆虫図鑑でアオスジアゲハという種類なのだと知り、きれいな蝶だな～早く見たいな～と蝶になるのを今か今かと待ち続けていた。

その日は小学校のプールに行った後、いつものように青虫の様子を見てみると、さなぎがいなくなっていた。もしかしてまたアリに・・・？と思い、家にいた父に「お父さん、青虫が・・・！！」と言うと、父が「もう青虫はいない。蝶になって巣立っていった。あの青虫は助けてくれたお前に一番に蝶になった姿を見せたかったんだろうな。さなぎから蝶になった後もしばらく動かないで、お前の帰りを待っていたんだよ。」と優しく言い、それから「よく世話を頑張ったな。」と言いながらカメラで撮った蝶の写真を見せた。私は肝心なところを見れなかった悔しさと、それ以上に蝶になった嬉しさと涙が止まらなかった。

自然の定理が分かった今振り返ってみると、やっぱり父の言っていたことは正しかったので自分が行った行為が正しいのかわからない。だが、あの時見せれなかった姿を見せに来たのか、あれから毎年のように家の花壇にはアオスジアゲハが飛んでくるのを見ると、アリには悪いが助けて良かったなと思う。父に「あれから毎年花壇でアオスジアゲハ見るね。」と言うと「自分が生まれたところに卵を産む習性があるからだ。」と冷たく答える父も、実は私よりアオスジアゲハが来るのを楽しみにしている。

たくさんの思い出をありがとう。また来年も会えるのを楽しみにしてるよ。そう言う私の目の前のアオスジアゲハは満足したように、どこかへ飛んでいった。

赤ちゃんを傷つけないために —幸せな家庭への一歩—

陳 佳 怡

エミリー・ボディリーが夫の無知で起こした「揺さぶられっ子症候群」で幼い息子を亡くした後悔について語っている手紙の抜粋。

気になった翻訳：

Instead, I always try to keep that day as busy as possible, so I don't have time to visit the cemetery or to think about that day means to me.

その代り、私はいつもあの日のことを忙しさの中で忘却しようとしてきたので、墓参りにも行けていないし、あの日が私にとってどのような意味を持つものなのかも考える余裕はありません。

Not knowing my whole life would be changed by one phone call, I answered and Jason seemed calm.

あの一本の電話で私の人生がすっかり変わってしまおうとは思いません、私はその電話に出ました。ジェイソンは落ち着いていました。

Instead of seeing him open Christmas presents the next morning, I was wondering how to plan his funeral.

息子がクリスマスプレゼントを開ける姿を見るはずだった翌日に、私は彼の葬式の手はずを思案していたのです。

Jason took my pride and joy away from me and it was all because he could no longer stand to hear Elijah cry.

エライジャのお父さんジェイソンは私の誇りと楽しみを私から奪い去ってしまいました。それはすべてジェイソンが泣き止まない息子エライジャに我慢できなくなったことから起きたことなのです。

She sat next to me and told me that Jason had been booked into jail because he had admitted to shaking Elijah.

ジェイソンの母親は私の隣に座って、ジェイソンはエライジャを揺さぶったことを認めたので投獄されることになったと私に伝えました。

I still have hard days, and always will, but I know that I am doing everything I can to prevent another child from dying from this abuse and another parent from having to experience the pain this causes.

私は今でもまだ辛い日々を送っているし、そうしていくつもりです。しかしそうすることで、私はできるかぎりこの虐待で死ぬ子どもを減らし、このことで親たちが苦しむことを防いでいるのだと思っています。

感 想

私は初めてこの文章を読んだ時、びっくりしました。以前、お母さんから、赤ちゃんにとっては、首が柔らかいので、首を必ず支えないといけないと聞いたことがありますが、赤ちゃんが揺さぶりによって死ぬことは初めて知りました。

私たちが普段の生活で怒って相手を揺さぶっても、相手が死ぬことは絶対ありえないことです。でも、生まれたばかりの赤ちゃんにとって、それは危険なことです。

私が翻訳した事件はアメリカで発生したのですが、調べたら、日本にもこのような事件がありました。2012年に愛知県でお父さんの揺さぶりによって、次女が死にました。同じ事件は今年にも発生しました。大阪で26歳のお母さんの揺さぶりで生後4ヶ月の次男が死んでしまいました。2012年に台湾でもこのような事件がありました。このような事件はどここの国でも発生する可能性があることです。しかも、加害者に共通の背景はないようです。例えば、暴力傾向の人や、麻薬を吸っている人。調査によると、加害者はその背景とあまり関係ありません。

一般的には、赤ちゃんが泣いてどうしても泣き止まないと、若い男性、例えば、お父さんは怒って赤ちゃんを揺さぶる可能性が高いようです。赤ちゃんを殺す意図はありませんが、揺さぶると赤ちゃんが死んでしまいます。

揺さぶりによる脳の出血は落下の衝撃による出血とは違います。子供が落下または他の衝撃をうけたら、頭皮上のあざや擦り傷などの頭部外傷がある場合が多い。揺さぶられる被害者は外部の傷害症状がないかもしれない。そのため、誤診する場合は多いです。それは、怖いことです。

このようなことは予防できることだと思っています。揺さぶる行為で赤ちゃんを殺してしまうので、予め知ることは重要です。そのため、広く知らしめることは重要です。私も自分の力で多くの人に知られるために、何とかしたいと思っています。

最近我读了一篇由一位“婴儿摇晃综合症”而失去孩子的美国母亲写的一封信。孩子的母亲难以相信，平时这么爱孩子的父亲怎么会摇晃孩子而造成孩子死亡的。对于成年人来说，摇晃对方造成对方死亡，这是不可能的事情。然而，对于大脑还没有完全发育的婴幼儿来说却是致命的。

查了资料后发现，日本、台湾、瑞士等国家也发生了类似的事件。这样的事件任何一个国家都可能发生。通常都是由于婴儿哭闹不止造成婴儿父母或看护者失去控制，通过摇晃婴幼儿来使其停止嚎哭。但这样会导致婴儿的脑部永久性损伤，甚至死亡。这样的事情通常由于父母或者看护者不知道如何正确面对婴幼儿的啼哭而造成的。但是，完全可以预防。让父母或者看护者学习正确的安抚婴幼儿的方法，并且知道摇晃对于婴儿的伤害就可一定程度避免发生这样的悲剧。所以，我也让更多的人知道“婴儿摇晃综合症”，避免更多的人因为无知而造成的悲剧。

夢と魔法に出逢える場所

～Walt Disneyが創り上げた世界に迫る～

小林 秀美

日本最大級のテーマパークといえば、東京ディズニーランド。どの時期でもそこは人で溢れ、笑顔に満ちている。私自身もそんなディズニーランドが大好きで、年に数回訪れる。夢の世界と言われるディズニーランド。そこに入った途端私は幸せな気持ちに包まれる。パーク内に漂うポップコーンの甘い香り、キャストたちが笑顔で手を振る姿、パーク内に響き渡る陽気な音楽。その全てが私を夢の世界へと誘ってくれるのだ。そこではアトラクションの待ち時間の間でさえもワクワク感やドキドキ感を感じさせる。歩き疲れてしまっても喜びや楽しさを感じる。日本には他にも様々なテーマパークが存在する。各々にももちろん魅力はあるが、やはりディズニーランドに勝るものはないと思う。それではなぜ、ディズニーランドはそれほどまでも多くの人を魅了し、愛され続けているのだろうか。

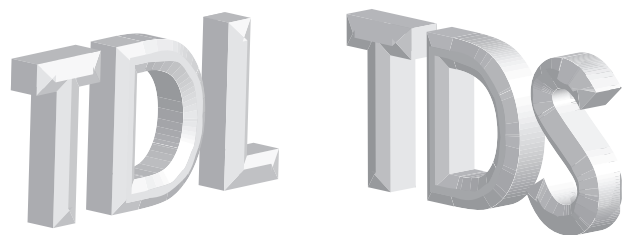
私たちは成長するにしたがって多くのことを知り、学ぶことで子どもの頃に純粋に信じていたサンタの存在や、着ぐるみの正体を否が応にも知ってしまうようになる。しかしそれでもなお、私たちはディズニーランドに夢を感じ、そこに“幸せ”を感じる。ディズニーランドは何歳になろうと楽しめる場所なのだ。

その愛され続ける理由は東京ディズニーランドを支える **キャスト** たちにある。Walt Disney が創り上げたこのディズニーランドはキャスト一人一人が夢を作り出そうとする熱意に満ちているように感じる。私たちゲストはディズニーランドの裏側を知らない。迷子放送を聞いたこともなければ、パーク内にゴミが散在しているところも見ることがない。これはいかにキャストたちがディズニーランドの世界観を大切にしているのかということを表している。キャスト一人一人がディズニーランドを心から愛し、彼ら自身が私たちに夢を与えたいと願い、ディズニーランドを創り上げてきたのだ。そんなディズニーランドは私たちに本当の意味での時間を忘れさせてくれる。夢と魔法に出逢える場所—ディズニーランド。それはパレードやキャラクター、建物という物理的なものからだけでなく、キャストたちのホスピタリティ、“おもてなしの心”という見えないものから作られていたのだ。ディズニーランドの創設者・Walt Disney はこう残している。

【Laughter is timeless. Imagination has no age. And dreams are forever.】

一笑い声は時代を超え、想像力は年を取らない。そして夢は永遠に持ち続けられる。—彼の思い描いていた夢こそがディズニーランドが多くの人びとに愛され続ける理由なのだ。

リピーターである私は、この半年ですでに6回訪れている。



Once Upon a Time 夢の国で魅せられて

原 里衣菜 (はら・りいな)

夏休み、私の中で毎年恒例になりつつ夢の国の旅。毎年行っても全然飽きない。またここに来るために日々頑張れる。それほどディズニーリゾートは大好きな場所だ。まだ若いと言いたいところだが、そんなことはなく、年々、開園から閉園まで一日中パークを歩き回ることがきつく感じるようになってきた。ああ、お母さん。昔、わたしがまだ元気な子だったころに、一日中パーク内を連れまわしてごめんね。ん？むしろ、私が連れまわされていたのかな。ともあれ、私はもともと、絶叫系の乗り物が得意ではないし、アトラクションに乗るのがしんどいのだ。並ぶのだって二時間を超えてくると、座りたいということばかり考えてしまう。そこでわたしは提案する。休憩がてらにパレードやショーを見ようと。少し前までは、本当に休憩がてらと思っていた。でも今は違う。パレードやショーは休憩なんかじゃないのだ！！！！！！(大声)そして私は、心身ともに疲れた大人(私)も楽しめるディズニーの魅力にどっぷりとはまってしまったのだ。

アトラクションに乗りたい人もいるし、やっている時間も限られているし、なかなか見ることができずにいたショー。時間がちょうど合ったこともあり、今年ようやく、ディズニーランド、ショーベースで上演されているワンマンズ・ドリームII-ザ・マジック・リブズ・オンを見ることができた。ミッキー、ミニーはもちろん、私の大好きなドナルドダックや、ディズニープリンセスたちも登場。ドナルドダックのみどころがたくさんあり、テンションがあがって、気づいたら、ドーナちゃん！！！！(私は彼をこう呼んでいる)と叫んでいた。もう一つ私が思わずきゃああと黄色い歓声を上げてしまったのは、イケメン外国人ダンサーさん！！！！高身長！！小顔！！スタイル抜群！！笑顔も素敵！！構成も凝っていた。急に背景が暗くなって、低い音や、激しい音が鳴りひびき、魔女や悪役が大声をあげたり、メルヘンな音楽がかかっってお姫様と王子様のとろけるようなキスシーンがあったり、ノリノリの音楽がかかっキャラクターもカラフルな衣装になって、歌って踊ってみんなで盛り上がりだしたりなど、子どもから大人までみんなが楽しめる盛りだくさんの内容だった。ショー最高！！ショーだと、ダンサーやキャラクターがこちらに手を振ったり、投げキッスをしてくれたり、我を忘れて、やり返してしまう。他のショーもぜひ見たいと思った。目と耳からディズニーの世界を感じ、自分もまるでその世界にいるような気持ちになれる。子どもの頃、お姫様になりたいと夢見ていた自分が戻ってきたのか。もしかしたら、心のどこかでまだ夢見ているのかもしれない。そんな気持ちを刺激された。疲れた大人のみなさん、一緒に魅力にはまってみませんか？(中毒性あり)

そして、最後は定番、エレクトリカルパレード(大好き!)で締めと言いたいところだが、今年は違った。今年からディズニーランド、シンデレラ城ではじまったワンス・アポン・ア・タイムを見ないわけにはいかなかった。プロジェクションマッピングによる映像、光、音の融合。圧巻。ベットタイムストーリーとして多くの有名なディズニーの作品を読んでいくという設定のもとディズニーの世界に引き込まれていく。どんどん引き込まれていく。不思議の国のアリス、ラプンツェル、シンデレラ、ピーターパン、くまのプーさん、白雪姫、美女と野獣など、次々ディズニーの名作一挙大放し！！残念ながら抽選に外れたため立ち見だったが、足が痛いのも忘れるほど、うっとりしたり、はらはらしたり、テンションがあがったりと、自然といろんな気持ちになっていく。特に、うっとりするのがラプンツェルのあのシーン・・・ネタばれになるのでやめておこうか。今年日本でも話題となったアナと雪の女王もちょっと登場するので、お楽しみに。幸せの気分のままパークの外にでると、現実に戻されたようで少しさみしくなる。しかし、ここ、夢の国にいる間は、時間が経つのも忘れて楽しむことができる。ディズニーの素晴らしい音楽とキラキラとした光、鮮やかで迫力のある映像、そしてかわいい、美しいキャラクターたち。そういったものの融合を目で、耳で、肌で、心で、体中で感じることができる、これがディズニーマジック！！ショーやパレードでキャラクターやその物語の世界に魅せられて、素敵なお夢を見ていける気がするのだ。



僕のお茶と読書事情プラスお薦め映画

森 大地

僕の、書斎の、机の、左端。

勉強の時にサブテキストを開いたまま置いておくため、中華料理屋からもらってきた少しオリエンタルな木の台。

そこには今、勉強の資料はなく、J・D サリンジャーとポール・オースターの小説が積んであって、仕事の合間や、電車の中で少しずつ読み進めている。

普段は、病気かと思われるくらいにコーヒーを飲む。

今日なんて、学校に行く前にわざわざコーヒーミルで豆をたくさん挽いて、作ったコーヒーを魔法瓶に入れてったよ。

でも、自分の時間がちゃんと取れて、本を読める時には、できるだけ紅茶を飲もうとする。

それは、昔に夜のカフェの真似事をしていた時の名残りでもあって。

その当時、客に出していた耐熱性の一人用ガラスポットは、お気に入りのひとつ。

そいつに、スプーンも使わず適当に茶葉を入れ、コポコポと勢いよくお湯を注ぐ。「勢いよく注ぐ」のがポイントで、そうすればなんだか美味しくなるってわけ。

最近よく飲む紅茶は、缶に刻まれた二匹の猫のデザインが好きで買った。

強いベルガモットの香りがあるフレーバーティー。

でも、ホントのところ、僕はベルガモットってやつがどういうものか知らない。

柑橘類ってことぐらいは想像つくけど、見たこともないし、食べたこともないよ。

オレンジみたいにうまいものなの？

それとも、レモンみたいに酸っぱいの？

今まで出会った愛すべき読書狂たちは、村上春樹に傾倒している人が多かった。

そんな彼らが僕に決まって言うことは「特に君は、絶対、春樹を読むべきだ！」

なぜだか、猛烈に、猛烈に、推薦される。

薦められるどころか、「ぜひ、読んで！」と、本をプレゼントされることも多くて、僕の部屋には村上春樹の本は、ほぼ揃っている。

『海辺のカフカ』なんか、上巻が三冊もあるんだよ！

なぜそこまで推し薦めてくるのかが気になって、ある時、聞いたことがある。

聞いたのは4人だけど、4人ともが同じ答えで「君は、どこか春樹の本に出てくる『僕』に似ているんだよ。」

彼の本には、きまって『僕』が出てくるらしい。

でも、それって誉められてんの？
けなされてんの？

それさえもわからない。

だって、今までまだ一度たりとも村上春樹の本を読んだことがないからね。

なぜだか、まだ、やっぱり読んでいない。

天の邪鬼な僕の無意識がちょっとした抵抗を試みているからなんだろうなあ？
(基本的に「〇〇さんに似ている」と言われるのがあまり好きではないしね。)

一番、気にはなっているけど、なぜだか読んでいない作家さん。

それはまるでベルガモットみたいなもので
香りはなんとなく感じるんだけれども、実際にはどんなものかさえ知らない
それが僕の、村上春樹への印象です。

今、僕の、書斎の、机の、左端・・・に置かれた小説たちは、全部が同じ人が翻訳している。
柴田元幸さん。

モンキービジネスの編集長でもあり、翻訳家としても、アメリカ文学研究者としても、有名な方ですね。

この方、村上春樹さんととても仲がよろしいのですね。
二人の共著の『翻訳夜話』も、僕の左側には積まれている。

とうとう、こんな遠回りな感じで、村上春樹さんの書いたものを読むことになるのだろうか。

これがキッカケで、いっそ本当に村上さんの小説を開いてみようかな。

そんな、悩ましい日々がいつもの日常でかけがえのない大切なものだと感じます。

次は僕のおススメ映画の紹介。

『プラダを着た悪魔』を見て

●『プラダを着た悪魔』あらすじ

ジャーナリストを目指すアンドレア（アン・ハサウェイ）は田舎からニューヨークに上り

多くの女性が憧れるファッション誌『ランウェイ』の編集部就職する。

編集長ミランダのアシスタントをつとめることとなったアンドレア。

ミランダ・プリーストリーはランウェイの編集長をつとめるだけでなく

ファッション界において絶大な影響力をもつ人物だった。

しかし、ミランダは仕事だけではなく身の回りの世話など

様々な無理難題をアンドレアに押し付けるのだった

●感想

主人公は、優しい性格だったようで、「ミランダ」にはついていかなかったようだ。

「エミリー」という第一アシスタントも、ヒロインに意地悪するわけでもなく、

きちんと教えることは教えていたりし、

「仕事がうまくいくためには、全員が目的をひとつにすると上手くいく」

というのが、よくわかった。

主人公が鬼編集長の無理難題に耐えて認めてもらうようになるところが好感がもてた。

映画の世界だけでなく、実際にも仕事では先の先を読んで結果を出さないの。

映画では極端に描かれているが、編集長が望んでいるのは「言われたことだけではなく、言われる前に、言われた以上のことが臨機応変にできること」。

仕事や家庭で「成功＝結果を出す」には、何らかの犠牲、時には残酷な判断も必要。

映画の終盤で、編集長は自分の立場を守るために部下を裏切る場面があり、

主人公は「自分は誰か裏切ったりしたくない。そこまでして仕事に没頭して成功を求めたくない。私はそんなふうになりたくない。」と、携帯電話を噴水に捨てる。

私も映画を見ていて、随分な仕事の投げ出し方だと思うが、世間では「潔い勇気ある辞め方」だと評価されているのだと思う。

基本的に主人公の成長していく姿を描いたもので

上司に認められていく姿がワクワク、ドキドキした。

「光」とは何か

松本 裕也

小学生時代に大好きであるがあまり、周りの友人がコメディ番組や有名な芸能人の話をする中台詞を覚えるほどに繰り返し観ていた『ハリーポッター』シリーズ。この度偶然英語の勉強用に、または有意義に時間を費やせるようにと僕の母親が郵送してくれた物の中に DVD が入っていた。その DVD とは「**Harry Potter AND THE PRISONER OF AZKABAN**」だった。

この作品は成長過程にある子供が感情に振り回される様子を主人公である魔法使いハリーやその周囲の魔法使いの友人が殺人そして脱獄犯として指名手配されたシリウスブラック、そして彼をとらえるために魔法学校ホグワーツに魔法大臣、つまり日本で言う安倍首相、の意向により配置されたディメンターという近くにいるものの辛い記憶を呼び起こしその者の生気を吸い取る **creature**（この **creature** とは邪悪な魔法生物と害のない魔法生物の両方を表すとする）の二つの脅威に晒されつつ起こる出来事を描いたものである。小学生時代はそこまでしか理解できていなかった。今回僕が見て感じたことはこの作品のテーマが「光」であり「光」という一語をどこまで深く考えられるかということと伴にハリー自身の成長だ。

ハリーは父親の友達であったルーピン先生、シリウスブラック、本当の裏切り者であるピーターペティグリューの3人全員に顔の形、勇敢なところは父親似であるが目、つまり成長とともに変わらない部分は母親似であると言われた。つまり“光”の受容体が特徴的だといえるということだ。またこの作品中個人的に気になった“**Brilliant**”という光に関する **word** を何度も何度も使っている点だ。以上のことからこの作品が“光”を強調したいということが伺える。

映画の序盤で校長であり強い魔法使いであるダンブルドアがディメンターを置くことについて生徒に注意するシーンで“**But you know, happiness can be found, even in the darkest of times if one only remembers to turn on the light**”と言う。この“**the light**”とは何だろうか。僕はこのシーンでダンブルドアは実際に消したロウソクの火を点けながら喋っていたが、この“**light**”とは“幸せな記憶”だと思った。なぜならディメンターに対抗できる呪文の力の源がこの“幸せな記憶”だからだ。

この映画の中盤では、闇の魔術に対する防衛術の授業で自分の恐れているものに姿を変えるボガートという **creature** がハリーの目の前に来たときボガートはディメンターに姿を変えた。この授業の先生であるルーピン先生はハリーに“**That suggests what you fear the most is the fear itself**”といったことからハリーは心の中で恐怖自体が怖いと思っている。このシーンのかなりあとにハリーはディメンターに対する大変高度な対抗魔術でディメンターを追い払うことに成功している。

さらにこの作品の終盤でシリウスブラックはハリーに“**The one that loves us never leave us. They are really in here.** (ハリーの胸を指差しながら)”と言う。この2つのことからハリーの心は幸せな記憶が恐怖に打ち勝ったことを示し、その記憶とは家族の記憶であり元々ハリーの心のなかにあるもので、最も力の強い記憶が家族の記憶であることを示唆している。“光をつける”ということは材料があり、皆がその材料を持つということなのだ。つまり“幸せ”とは皆が心に忘れず持っているものを思い出した時に得られる最も有力な恐怖への対抗手段だといえる。

久々に観ることができたこの物語で、“光”と“幸せ”を併せて掲げているこの作品に触れて、様々なことを考えさせられた。ハリー自身も感情に左右され度々“**lose the temper**”の字のごとく自分の感情を見失っていた。しかし最後には自分の心、感情の一番強い部分が何であるかを学んだ。かなり苛々しやすい僕も何かにつかって自分を見失いそうになったときには一番強力な幸せな記憶、家族のことを思い出し、自分の支えにして自分が向かうべき方向に向かっていきたいと思う。

『レ・ミゼラブル』に描かれた愛

中村 愛

私が心躍る瞬間は、大好きな映画『レ・ミゼラブル』を観ているときであり、自分の名前が愛だけに、愛をテーマに描かれたこの作品を観て思ったことを書こうと思った。この作品はヴィクトル・ユーゴー原作の小説をもとに世界各国でロングラン上映されてきたミュージカルを映画化したもので、セリフはほぼ歌となっている。舞台は19世紀のフランス。1本のパンを盗んだために19年間も獄中生活を送ったジャン・バルジャンの生涯を描いた作品である。

まず私が注目したのは、エポニーヌのマリウスへの「愛」である。エポニーヌが、胸にさらしを巻いて男に変装し、マリウスとともに学生による革命に加わるシーンがある。私は彼女が胸にさらしを巻くシーンを観たときに、彼女は、単に男に変装をするのではなく、“マリウスに恋をする女”という自分を捨ててさらに、胸にさらしを巻く行為がマリウスへの想いという目に見えないものを、さらしという物理的なものを使って自分の胸に留めようとしたのではないかと感じた。マリウスは、自分じゃない他の女性を想っていて、自分には絶対に振り向いてくれないと分かっているのに彼の事だけを想い、彼の傍に居るだけで幸せを感じていた。そして彼女は、最後には革命の最中に彼をかばい銃に撃たれて死んでしまう。エポニーヌは死ぬ直前に、コゼットから預かったマリウス宛の手紙を彼に渡した。彼女は彼の幸せを最後まで一番に願っていたのだ。私はエポニーヌのマリウスに対する一途すぎると言ってもいい「愛」に切なくなると同時に、自分を差し置いて一番に考えることのできる人がいるというのはとても素晴らしいことだと感じた。

次に私が一番注目して観ていたのは、主人公ジャン・バルジャンによるコゼットへの「愛」である。ジャンは、コゼットをファンティーヌから引き取った頃から、コゼットにずっと愛情を与え続けていたわけだが、マリウスが現れたことによって自分だけに注がれていたコゼットからの愛情がマリウスに注がれてしまうことになってしまう。そういう葛藤が彼の中にはあったはずだ。しかし、ジャンは革命で傷を負ったマリウスを助けるのだ。マリウスを助ける場所が見つかる、革命の反乱者として処刑されてしまうため、見つからないように運ぶ必要があった。そこでジャンは当時病気の源であったにもかかわらず、下水道を通して命がけでマリウスを助け出すのだ。ジャンは彼が死んだらコゼットは悲しむと思い、また、2人が結ばれることはコゼットにとって最大の幸福だろうと考えたゆえの行動だったのではないか。また、ジャンはマリウスを救出した後、自分が元囚人であったことと、旅に出るということをマリウスだけに伝えて、2人の前から姿を消し、教会で隠居生活を送る。

コゼットが、自分が囚人だったことを知ると彼女はきっと傷つくと考えたのと、ジャンは彼女には娘を愛するいい父親であり続けたと考えたためだと感じた。彼はこうして、コゼットを引き取ってからあの世へ行くまでずっと「愛」を与えつづけ生涯を終える。

この作品は登場人物それぞれの色々なかたちの「愛」が描かれているおり、まさに「愛」に満ちた作品である。幸せや「愛」とは何かを考えさせてくれる素晴らしい作品だと私は思う。



ダンスの魅力

三宅 周子 (みやけ・ちかこ)

私は中学校へ入学した時、仲良くなった友達がダンス部に入るからという不純な動機でダンスを始め、今日までずるずると続けてきました。ずっとダンスをしてきて自分が楽しければよいと思っていたけど、大学に入ってからとは違う目線でダンスの魅力について考えるようになりました。それを書いてみようと思います。

ダンスは体を動かす運動であるけれど、他のスポーツとは異なる点がたくさんあると思います。まず、ダンスは人に見せることを目的とするものです。そのために私たち踊り手は見せ方、お客さんからの見え方、伝え方、表現の仕方など様々な工夫をします。

自分たちが伝えたいことが伝わるように、お客さんに何らかの感情を抱かせたくて踊ります。スポーツ観戦をして、感動することもあるかもしれませんが、それとはまた違った種類のものだと思います。そう思いながらも、私は本番中にお客さん一人ひとりの反応を見ることはあまりありません。大きな舞台であれば、照明は舞台のみにつくので、客席は暗くて全然見えません。野外であれば全体の雰囲気程度しか感じることはできません。正直に言うと伝わっているかよりも、自分ができる一番の演技をするということを考えながら踊っています。これは自分がまだまだだと感じる部分であり、出来ていないからこそ次につなげたいと思える部分でもあります。

どの競技にも共通のことですが、一回きりの本番や試合のために、その何倍もの練習をするということがあります。しかしダンスは試合で勝ち負けが決まるものではなく、自分たちが作ってきたものが認められるかどうかや、その日の完成度で、作品の評価が決まるところがおもしろいところです。たった一回きりの本番のたかが数分のために一生懸命練習と試行錯誤を重ねます。本番の数分はたった一瞬ですぎさっていきます。でもその一瞬の中に今までの自分たちの頑張りがつまっているのです。ダンスの先生がよく言われる言葉で、「頑張っている姿は見せなくていい、お客さんには綺麗に踊っている姿しか見せるな」というのがあります。お客さんは踊り手の頑張っている姿ではなく、綺麗で優雅なダンスを見に来ています。本番中に余裕のある姿を見せられるように、練習は欠かせられません。

そしてダンスに欠かせないのは一緒に踊ってくれる仲間と、見てくれる人たちです。やはり一人で



踊っていても楽しくありません。仲間と呼吸をあわせて、本番中は隣で踊っている人を感じながら踊ることが幸せであり、よりよい作品につながります。そして私たちは見てくれる人がいるということで普段の何倍もの力を発揮することができます。

年を重ねるにつれてダンスの本当の楽しさに気づき始めたので、これからも続けてもっとダンスの魅力について研究していきたいと思っています。

アジアの歌姫 Namie Amuro

長峰 千晶

「何している時がいちばん楽しい？幸せ？」と聞かれたら即答で「安室ちゃん！安室ちゃんを見ている時！聞いている時！」と答える。私は安室奈美恵さんの大ファン。にわかとかじゃない。「女子って安室ちゃん憧れる子多いよな～」と言われても、「そこらの程度じゃない。」と答える。CDやDVDの発売が発表されたらすぐ予約して、発売日より前にフライングゲットする。もちろん先行予約特典のポスター付きのもの。部屋はポスターやCDで安室ちゃんだらけ。ファッション雑誌などの表紙を安室ちゃんが飾っているものは買ってインタビューなど熟読する。ファンクラブにも当然入っている。ライブツアーは毎年3回行っている。同じものを3回見ても毎年足りない。だからその年のツアーのDVDを何回も見ると。見るたびに新しい安室ちゃんが発見できて、すごく楽しい！ホットペッパーという無料の月刊フリーペーパーがあるのだが、毎月注目の女優やタレントなどが表紙を飾る。それは地方によって背景や衣装、ポーズなどが違う。その表紙に安室ちゃんが選ばれた月のホットペッパーを私は全国分取り寄せて保管している。中身は全く関係なく安室ちゃんが写っているのは表紙だけなのに、そこまでしてしまう。相当好きなのだな、と周りに言われるし自分でも思う。これまで幾らお金や時間をかけてきたらどうか。

安室ちゃんのライブは2時間で約30曲をたった一人で歌い上げ、MCは一切なしで踊りっぱなし。喋るのはアンコールも終わって最後の最後に「今日はどうもありがとうございました！また遊びに来てね！バイバイ！」のみ。皆は「MCなかったらおもしろくないやん！」と言うが、私は思わない。むしろ、衣装チェンジやダンサー紹介以外で休憩なしで歌って踊るところが魅力的ですごくカッコいい。テレビでの露出も3年前くらいからめっきり減り、今では音楽番組などにも出なくなってしまった。彼女はそういうスタイルなのだ。だからこそ本当に稀にしか見られない、ライブ中にミスしたり歌詞を間違ったりした時の素の表情が見られた時すごく興奮する。会場が、きゃ～！！と黄色い声援で沸く。曲ごとに違った顔を見せるのが何とも言えない。中国や台湾、韓国でも人気で、ライブに何万人も動員している。安室ちゃんの素晴らしいところを挙げだしたらキリがない。

「安室ちゃんのどこが好き？」と聞かれたら答えられない。外見で言うと私の中では全て完璧だ。綺麗な二重、キリっとした眉、可愛らしい童顔、小さな顔、スタイル、カッコいいファッション。女の子なら誰もが憧れるルックスの持ち主だと私は思う。37歳には決して見えない。そして低くかすれた声やキレのあるダンス、周りに振り回されないスタンス、生き方、世界観。私史上最高の女性だ。22年のキャリアでずっと日本の音楽界の第一線で活躍していることは素晴らしいことである。

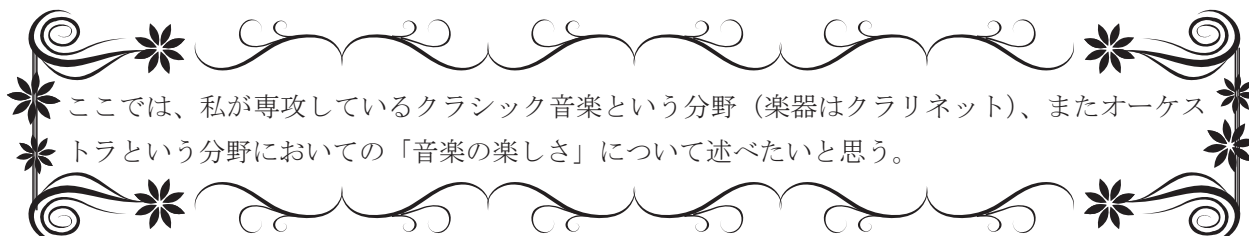
楽しい時、モチベーションを上げたい時は当然彼女のアップテンポの曲を聴く。そして悲しい時、寂しい時、落ち込んでいる時や腹が立っている時は元気が出るバラードやミディアムナンバーを聴く。今まで何度も安室ちゃんの歌に助けられてきた。何でも頑張ろう！と思える最大の活力の根源である。

もっと色んなことを書きたいが、書き出したらキリがない。私はこれからもずっと彼女のファンだし、応援し続ける。

安室奈美恵さんが大好きだ！！

音楽の楽しさとは

佐々木 結



ここでは、私が専攻しているクラシック音楽という分野（楽器はクラリネット）、またオーケストラという分野における「音楽の楽しさ」について述べたいと思う。

クラシックというと、堅苦しくて、難解で、よくわからないという印象を持たれるが、というか自分自身がそうであったが、果たして本当にそうなのだろうか。例えば映画音楽。歌が入ったポップスもよくあるが、オーケストラによってダイナミックで迫力満点な、不気味でファンタジックな、あるいは静かに胸を打つような感動的な音楽に、映画の内容だけにではなく、音楽に対しても、私たちは心揺さぶられはしないだろうか。また、有名なJ-POPをピアノやオルゴールなどで編曲したCDも昨今多く見られるが、「歌詞」という歌の命がないにも関わらず人々が楽しめるということは、その曲の音楽自体に魅力を感じており、つまりポップスの音楽というのはクラシック音楽から派生したもの（クラシック音楽を凝縮、あるいは簡素化したもの）であるので、音楽自体に魅力を感じるなら、いわんやクラシック音楽をやとなるのである。もちろん上記の例では、映画の感動が音楽を聴くときにも移っているだろうし、ピアノヴァージョンを聴くときも好きなアーティストの声が脳内で再生されているから心地よいのかもしれない。しかし肝心なのは、クラシック音楽を身近なものとして理解できる機会は実はどこにでもあるということなのである（それだけでは理解できない音楽もあるけれど）。

さて、今度はオーケストラという形態について語っていききたい。オーケストラは基本的にヴァイオリンやチェロといった弦楽器、フルートやクラリネットなどの木管楽器、トランペットやホルンといった金管楽器、そしてシンバルやティンパニやバスドラムといった打楽器という、4つの楽器群の集まりによる演奏である。実はこのそれぞれの楽器群には得意・不得意があり、そのためオーケストラの中での活躍の仕方も変わってくる。弦楽器というのはオーケストラの花形、柔らかい音色でどんなに弾いても邪魔にならない。息継ぎもいらないので一生演奏してられる。メインにもなるし、低い音で全体の支えにもなる。例えるなら米。しかし一つ一つの楽器の音量は小さいので同じ楽譜を何人も演奏する。やはり米である。次に木管楽器。この人たちは、楽器によってかなり音色に違いがありキャラがはっきりしている。速い動きも得意で、それぞれが木特有の優しく美しい音色を持っているので、個人個人が目立つ動きをさせられる。弦楽器は同じ楽器に6人も7人もいるのに、木管楽器は一楽器につき2人しかおらず、しかも2人とも違う楽譜を吹いているのである。色も触感も風味も違う野菜がごろごろという感じ。それから、迫力満点で華々しい金管楽器。弦・木管楽器の柔らかさにドドーンと勢いを持たせる。まさしく肉！楽器一つ一つのもつ音量が凄まじく、盛り上げ役にぴったり。聴衆を音で圧倒することができる。そして、そんな弦・木管・金管に一味違う面白みを添える

のが打楽器である。トライアングルで可愛らしさを演出し、カスタネットでリズムに高揚感を出し、シンバルのジャー—ーン！で弦・木管・金管という3つの楽器群を一撃で撃破してしまう。打楽器は薬味なのである。

そんな風に、それぞれの役割を持った楽器群が、その楽器のスペシャリスト達に演奏される。師匠に習い、専門の学校にいき、一日何時間も練習に励む生活を何年も、何十年も続けて、才能を認められてやっとプロのオーケストラ団員になれる。そんな職人たちがざっと50名ほど集まって一つの作品を完成させるため心を通わせ合う。それが面白くないわけがない。きっとそれこそがオーケストラが人々を魅了し続ける理由なのであろう。

しかし、いくらプロで同じ作品を演奏するからと言って50名全員が同じ方向を向いているなんてありえない。それを統制するのが指揮者の役割であるが、今回は指揮者の存在については考えないことにする。一流の演奏家同士であっても互いの演奏をボロボロにこき下ろしあっている人はいる。さまざまなタイプの歌手が支持されるように、音楽家も個人によってさまざまな色をもっているのである。

最近の経験で言えば、同じ楽器の専攻生たちで演奏会を11月に行ったのだが、その練習が非常に大変であった。4回生である私は今回の練習を中心になって進めなければならなかったが、10人の、それも大学に専門で来るような学生ともなると、学年による技術の差はほとんどない。それぞれスタイルを持ち、自分の音楽観を持ち、プライドも持っている。一つの個所について3とも4つも解釈が出てくる。「もっと小さく」「いや逆に大きく」「だんだん変えていったら」。その一つ一つを、試したり話し合ったり、譲歩したりして作り上げていくのである。正直、もうやりたくない、自分にはまとめられないと何度も思った。自分ではこちらが正しいと思っているのに分ってもらえないという憤りもあった。しかし、時には自分の本意を曲げて相手にも合わせる必要があると、それによって得られる感動というのが必ずある。苦しんだ分だけ演奏会ではみんなの心が一つにまとまり、それが力になって演奏に表れる。そんなふうにして、自分以外の誰かとともに音楽活動をする際には摩擦も発生するが、その摩擦があるからこそより音楽は力を持つことになるのだ。

ここで、本来なら自身の演奏音源を添付すべきところなのだがちょうど良いものがなかったため、私がクラシック音楽を好きになったきっかけの曲を紹介したい。それはドヴォルザーク作曲 交響曲第9番「新世界より」。何とも哀愁漂う、しかしはっきりとした強い意志を示す、土臭さを感じられるような第1楽章。遠き山に日は落ちて、の歌詞で日本では親しまれている、まるで古き良き日本の夕暮れを思わせるような第2楽章。どこか追われるような切迫感とおだやかで優雅なダンス部が入り混じる第3楽章。そして、誰もが1度は耳にしたことがある力強いメロディー、オーケストラの品位と迫力が一体になった音で第4楽章は聴いた人を必ず魅了するであろう。

その曲自体がもつ魅力、オーケストラという複雑な構成に組み込まれる面白さ、誰かと音楽をつくりあげていくやりがい、様々な側面から、私たちは音楽の中に楽しさを見いだすことができるのだ。

